音の杜
OTOnoMORI
会報 Vol. 11 2011.8.15 発行

『スケッチブック』に描かれた音のポエム

大谷 よしみ

東日本を襲った未曾有の震災から５ヶ月が過ぎました。会員の皆さま方には、お元気で夏をお過ごしでいらっしゃいますでしょうか。東北地方の会員の方も多くございますので、スタッフ一同たいへん案じておりました。
今回の震災と、直後の原発事故による大きな悲しみ、悔しさ、怒り、憤り、反省、信頼、勇気･･･、様々な思いと感情が渦まいた５ヶ月を過ぎ、いま改めて日本人すべてがこの国の今後のありようを担う責任を感じ、考える毎日を過ごしているのだと思います。

そんな中、昨年から計画していました通り、５月18,19日の２日間“ピアノのイメージ曲集『スケッチブック』”のレコーディングを行うことができました。ピアノは東誠三氏、またディレクターをユージンプランニングの坂元勇仁氏にお願いし、佐藤先生の思いを汲み取ってくださる方々に囲まれた録音作業は、想像以上に順調に進められました。本日（8/12）無事にジャケット内印刷物も印刷所へ納めることができ、あとは9/3の発売を楽しみに待つのみです。

今回CDとなった『スケッチブック』は、こどもでも弾けるやさしい小さな作品43曲からなるピアノ曲集ですが、タカギクラヴィアさんのご協力でピアノ選びからはじまった一連の録音作業を通して、東氏の奏でる透徹した音の響きの中に、佐藤先生の悲しいまでに一途なメッセージを感じないではいられない心境になったのは、私の耳だけが聴き取ったものではないと思っています。このCDが、皆さまのお手元に届き、これら小さな作品一つひとつを丁寧に聴いてくださるならきっと、それぞれに聴こえてくるメッセージがあることと思います。

激しく訴えるように奏でる作品でなく、習いはじめのこどもにも弾けるような小品の中で、佐藤先生が繰り広げる現実離れした夢のような世界は、ちょうど今年のこの日本に生きる私たちへのメッセージのように聞こえ、制作の間何度も何度も何度も聴き返しながら、自分の内に静かに確かな強さを得たように感じました。

それは説明のできないことばの粒のようなものですが切々と訴える敏直流の詩なんだと気づきました。激しく訴えるタイプの作品にはないメッセージの表現が、すっかり私を捕らえました。『スケッチブック』は、絵画的な音のポエムなんだと気づいたのです。

どこまでも美しいものを追い求めていればいい。
現実の中に生きているから、だからこそ夢見る力を存分に発揮するのだ。
おひさまにまみれて思いきり喜び、雨の中で薄暗い心を歩き、落ち葉の匂いに土を慕い、虫たちのうごめきにあっけらかんとめぐる季節を知って、香しい紫に埋もれて酔いしれたとしても、嘘をつかず真実をみつめる澄んだ目で、いつでも軽やかにステップしていなさい。

先生がもし今日ここにいらしても、こんなことばは口にされないとわかっていますが、『スケッチブック』にはそんな風に音のポエムが描かれています。

“ピアノのイメージ曲集『スケッチブック』”は9/3発売です。「佐藤敏直の世界 ～邦楽とピアノの響き～」（東京オペラシティリサイタルホール）でお求めになれます。しかも会員のみなさまには一枚献呈ということになっております。ぜひお手にとって聴いてください。また、楽譜を読める方でしたら、ぜひ音にしてみていただけたらと思います。
今号の会報では、録音直後の楽屋で行われた即席座談会での、東誠三氏インタビューを掲載いたしました。どうぞお読みになってください。

いよいよオペラシティでの演奏会も近づきました。邦楽器８名の奏者の皆さんのリハーサルも順調に行われています。これまで演奏される機会の少なかった合奏曲にも取り組んでいただいております。こちらも当日の響きが本当に楽しみです。
今回が音の杜主催の最後の演奏会になるだろうと思います。スタッフ一同心を込めて取り組みますので、ぜひ皆さまお誘い合わせの上、東京オペラシティへお運びください。お待ちしております。

＜響きで描いた「スケッチブック」のメッセージ＞

東 誠三（ピアニスト）

５月に行われた“ピアノのためのイメージ曲集『スケッチブック』”のレコーディング終了後、ほっとされたピアニスト東誠三氏を取り囲んで、音の杜スタッフと制作スタッフ皆さんで、小さなお疲れさまタイムとなりました。ホール楽屋はちょっとした喫茶室の様相で、おにぎりや手巻き寿司、サンドイッチなど録音中につまめるようにと用意した軽食を片手に、スタッフそれぞれから質問が飛び交う座談会的インタビュータイムと相成りました。

この時の言葉の数々がたいへん貴重な内容でしたので、まとめたものをご紹介させていただくことにいたしました。ぜひご一読ください。

■ ピアノ選び

～ 繊細な表情が出せるピアノ ～

今回の録音では、事前に使用するピアノを選ぶことができたことがとてもよかったですね。今回は、佐藤先生のこどものための作品ということで、ものすごく大きな音量が必要ということではなかったですから、演奏する作品集の曲にあった音が出るピアノを選びました。

曲にあった音というのは、ひとことで言うと繊細な表情が出せるピアノということになるでしょうか。この場合、一般的に使う「繊細」という言葉のニュアンスよりもっと突っ込んだ繊細さというイメージを想っていただければよいかと思います。繊細というと何か弱々しい印象があるかもしれませんが、繊細な表情が出せると言うのは、盛んに動く人間の心の繊細さが表現できる、とでも言ったらいいでしょうか。どの方向にも盛んに動く人間の心の表情、特に佐藤先生の今回の作品は、そういう心の表情がとても鮮やかですから、その変化をつけられる、そういう音が出せる、変化のキャパシティの広いピアノだとありがたかったわけですね。

ピアニストの間では、いいピアノの条件として「反応がいい」ピアノという言い方をよくしますね。思った通りの力のかけ方をしたら、思った通りの音が出てくるというのがその人にとって反応がいいピアノです。今回は、そういう意味で一番反応がよさそうなピアノを選んだということですね。

■ イメージの広がり

～ 佐藤先生が出会った世界を感じる ～

本当は先生に居ていただいて、ああでもないこうでもないと言っていただくのがよかったに決まっているのですけれども、そこのところは想像して音を出す以外になかったわけですね、今回は。でも、弾いていて本当に曲の持っている表情というのが様々あって、イメージが広がるんですよ。タイトルがついていますよね。弾きはじめてみると、そのタイトルから「ああ、こういうイメージがこういう音になってる・・」と感じるそれを感じながらさらに考えつつ弾くというのがとても面白いんですね。もちろん弾き始める前にその曲の全体のイメージを作って弾いてみるわけですけれど、弾きながらも、次はどんな風になっていくんだろうか、と少し先を予想しながら音を出していくわけです。それがぴたっといい具合に行くととても良い。そうならない時は、弾いていてもつまらない演奏になってしまいますが。この時のピアニストの脳の中で起こっている反応というのは、相当面白いものがあると思いますよ。色々なことが起こっているので（笑）。

「スケッチブック」は、旅先で書かれたというのを伺って、なるほどなって思いましたね。旅先って普段見慣れない光景というのが必ずありますよね。パッと目に入ったものが、あ！なんだこれは、とか、温度も違えば湿度も違って、気候が違えば肌に感じる空気感も違う。お花が咲いていればお花の香りもするし、木があれば森の香り、海があれば海の香りがするわけですよね。そんなこと全部を含めて先生の感じた感覚や心で見た景色が、音になっているんだなって。そのことと出会うわけです、弾きながらよくわかってくるというような。



■ 佐藤作品と向かい合う

～ 登場人物はいつもひとり ～

9/3 の演奏会でも「ピアノ淡彩画帖」から何曲か弾くのですけれど、この作品もすごく視覚的なイメージがありますね。それを大切にできるといいと思っています。やはりあの作品は、先生の育たれた鶴岡周辺の風景なのかなあ、と弾いていてよく思います。先生の作品は、登場人物が多くないですね。「ピアノ淡彩画帖」も、ご自分ひとりしかいらっしゃらない。ご自分が一人いらして、ご自分のことを書いていらっしゃる、という感じです。だから弾く方は佐藤先生になりきるということですね。曲によっては、何人も登場人物があって、登場人物のやり取りでできているものもありますよね、ベートーベンにしてもモーツァルトにしても。でもそうではなくて、先生の作品は佐藤先生一人なんですね。佐藤先生の周りの空気、見えるもの、肌で感じるもの、鼻から嗅ぐもの・・・。あの作品は、「スケッチブック」に比べて少し複雑ですけれども、でもそのコンセプトというか基本的な先生のスタンスはかなり共通しているのではないかと思いますね。



■ 佐藤作品の面白さ

～ 素朴さと難解さ、独特な和音とリズムパターン ～

先生の作品の面白さは、素朴な面と難解な面が混在しているところでしょうか。今回の「スケッチブック」は素朴な面が全体を包んでいるのですけれど、その中に最後のあたりでちらっと、先生の持っている難解さが顔をだしていますね。その難解さをわあっと膨らませていくと、「ピアノ淡彩画帖」という曲集につながっていくんですね、そのまま。

その素朴さと難解さの混在というのがとても興味深いと思います。それから独特の和音の使い方と追いかけて行くリズムのパターンがあります。今回の曲集でも随所に出てきましたけれども、ピアノの場合だと 2 本の手で、どちらかがどちらかを追いかけていくというような。それを拍子と合わない形で追いかけて行く。このパターンは佐藤先生ならではのとても特徴的なものですね。「あ、また出てきた！」って思います。変な言い方ですけれども、「あ、またやってるな！」「あ、これこれ！」「先生らしい表情を見たぞ！」というような感じがしますそれがそこここに出てくるのが楽しいですね。

■ 響きを聴く

～ その場の衝撃音より漂う響きを ～

そして、佐藤先生は何より響きを大切になさっていますね。

ピアノの音って衝撃音からはじまりますよね。でも佐藤先生は響きの部分を積極的に使っていらっしゃる。ピアニストは、どうしても衝撃音の方に意識が行きがちなんです。でもある時から、作曲家にとっては衝撃音とその後の響きは逆転しているのかなと思うようになりました。特に近世になってドビュッシーあたりから完全に逆転していますよね。でももっと前から作曲家にとってはそこでずばっと出る衝撃音もその後で残る響きも、両方とも音楽の材料として存在していた。調味料に喩えれば、塩があって醤油があって酢があるみたいな感じでそういう捉え方で書いているのかな、って思うようになりましたね。

もちろん私たちピアニストは、そこで鳴らす衝撃音が間違っていたら話しになりませんから、そこに傾注していくわけですけれども、でもその後に響いてくる音というものに耳を向けていた方が音楽というのは正しく捉えられるのかな・・・、と思うようになったんです。

そう言う意味で、こどもの時代からこの「スケッチブック」を弾いていくと、音の出る瞬間だけで事足りるということがなく、とても良いのではないかなと思いますね。佐藤先生は、この響きにこそ耳を傾けてもらいたい、とそう思っておられたと思います。「スケッチブック」は、使い方次第でとても面白いこどもたちの反応が引き出せるのではないかと思います。

人間の心は、こうして後に残る響きの部分で何かを感じ合っているわけですからね。ことばのニュアンスだって、色んな言葉を色んな人が色んな喋り方をして伝わっていくわけですよね。その場で鳴る衝撃音そのものではなくて、響きの中にこそ聴くことのできる世界というものを、佐藤先生は描かれたのだと思います。

びんちょくごろく
敏直語録

No. 9

作曲作品ではなく、「佐藤敏直の文章のファンだった」という人は意外に多い。
先生の言葉には不思議な魅力がある。どの文章からも、厳しさと強さを支える深い優しさをみるように思う。ファンだったという誰もが、先生のそのとてつもない優しさに触れたくて、文章を何度も読んでは心に言葉をそっと置いて、大切にしまっているに違いない。
敏直語録では、佐藤敏直の「ことば」のきれはしや、鋭い「独り言」、また「散文」や「随筆」、音楽や教育への提言、編集長として毎月書かれていた「編集後記」等々、毎号少しずつ紹介いたします。
今回は、9/3の演奏会のプログラムであり、CD録音された、ピアノのためのイメージ曲集「スケッチブック」（カワイ出版）の楽譜に書かれた冒頭のことばを取り上げます。

『はじめに』

ここに収められた43曲は、『ムジカノーヴァ』1992年5月号から1993年3月号までのうち、10回にわたって掲載されたものですが、その中の何曲かは今回の出版に際して少し改めました。
少年の頃から、色や形に関心があった私は、自然の風景を見たり、目に浮かぶ情景をさらに拡げて想像したりするのがとても好きでした。絵を画いた時代もあり、画家になろうと真剣に思ったこともありました。
音楽では、絵でいう色や形を表すことはできません。でも音の響きからも、それらの組み合わせ方によって、さまざまな色彩が生まれます。私は、作曲を永く続けているうちに、いつしか、音楽を色彩的に書くことに興味を覚えるようになりました。いくつかの体験を通した今では、音色の異なったたくさんの楽器を鳴らすオーケストラはもちろんのこと、小規模な室内楽や、一見どの音も同じ種類の色に思えるピアノに対してまでも、それが可能であると確信しています。
≪スケッチブック≫は、音のスケッチですが、なにかしらの、いわゆる色彩的心象が動機となって音の響きに変換された小品集と思ってくだされば幸いです。ごらんのとおり、空、太陽、風、海、花、雨、雪などといった、自然や景色が中心となっていますが、ところどころに子どもや鳥や虫が顔を出し、また橋や家も姿を見せます。そして私は、それらの仲間に、橙、黒、紫、青といった抽象的な、色だけのタイトルも入れました。
曲の配列はやさしい順にはなっていません。ちょうど雑誌の発行時の季節に合わせて書き下ろした結果、ほぼ四季の風物が順番に並ぶことになったので、その移り変わりもまたひとつの表現にしたいと考え、あえてソートしなおすことをやめました。
このように≪スケッチブック≫は、文字どおり絵画的な曲集名ですが、いうまでもなく音楽ですから、音のメッセージを伝えることがその目的です。
気軽に、でも少しだけ気持ちを入れて弾いてくださることを願っています。

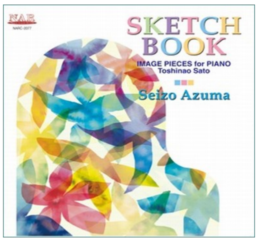
（1993年3月　佐藤　敏直）



CD いよいよ発売！！

ピアノのためのイメージ曲集「スケッチブック」（全43曲）

ピアノ：東 誠三氏





前号でもご案内しましたが、今年5月18・19日、東京都東大和市ハミングホールにて収録。東 誠三氏が醸し出す音の響き、それに画家を目指したこともある佐藤敏直氏が全曲にわたってつけたタイトルは、これはどんな色？と、想像が拡がってゆきます。 どなたにもお楽しみいただける逸品です。

2011年9月3日（土）東京オペラシティリサイタルホールにて開催される音の杜第3回演奏会「佐藤敏直の世界～邦楽とピアノの響き～」演奏会場でお求めになれます。

価格：１枚３千円（消費税込み）

当日は、東 誠三氏によるサイン会も予定しています。

音の杜年会費２０１０年度まで完納の会員（同封した緑色の「２０１１年度支援会費納入のお願い」の□蘭にレのない方）に、**今回発売のCDを１枚謹呈**します。

- **演奏会にお越しの方**・・・会場支援会員コーナーブースで、お名前と会員番号をお申し出いただき、直接お受け取り下さい。
- **演奏会にお越しでない方**・・・音の杜事務局より演奏会終了後、お送りします。

＊ 年会費は演奏会当日、会場支援会員コーナーブースでもお受けします。
＊ 現在、未納年度のある方も完納後に、CDをお送りします。

ホームページが新しくなりました！！

「音の杜」のホームページをリニューアルしました。ブログにより「音の杜」の活動状況などをタイムリーにお知らせいたします。

http://www.otonomori.com/





音の杜主催　第３回演奏会
「佐藤敏直の世界 ～邦楽とピアノの響き～」

開催迫る！

作曲家佐藤敏直の美しい「音の響き」が演奏される日が近づいてまいりました。
支援会員の皆様には、お誘い合わせの上、多くの方々が演奏会へ足をお運び下さることを願っております。

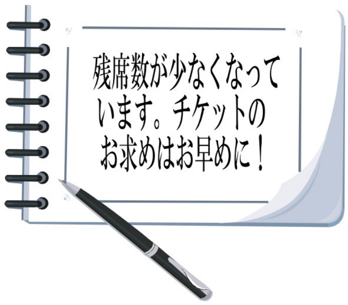
演奏会チケットのお求め方法

支援会員の皆様には、法人の場合は2枚、個人の場合は1枚に限り
3,500円でお求めいただけます。
＜ 一般 4,000円　　高校生以下 2,500円　　全席自由 ＞
東京オペラシティチケットセンターにお電話いただくか、音の杜へメールかFAXにてお申し込みください。（締め切り日にご注意下さい）

★ 東京オペラシティチケットセンターでは、8月28日（日）まで受付けます。

TEL： 03-5353-9999

受付時間 ： 10時～18時　 月曜定休



★ 音の杜では、9月１日（木）まで受付けます。
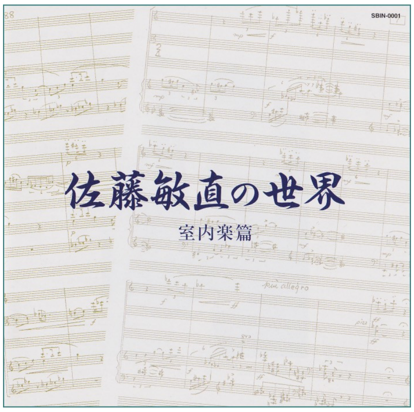
FAX ： 03-3239-1907　　e-mail ： otonomori@otonomori.com

8月28日から9月１日までにお申し込みのチケットは、公演当日に会場受付にて、精算の上、お受け取りいただきます。
9月２日以降は、恐れ入りますが、当日券をお求め下さい。

★ 当日券販売について

残席がある場合 16時より当日券を販売いたします。
公演当日、東京オペラシティリサイタルホール 03-5353-0788に 当日券販売の有無をご確認の上、直接会場受付にお越し下さい。
なお、チケット完売の場合は、当日券の販売は行いませんので、ご了承下さい。

※ ご購入されたチケットは、いかなる理由においても取替え・変更・キャンセルはお受けできません。
但し、公演中止や延期、その他のやむを得ない事由が発生した場合には、ご返金いたします。



「音の杜」では**『佐藤敏直の世界　室内楽篇』**（税込定価 2,000 円）のCDを販売をしています。CDは 2003 年に行われた追悼演奏会に合わせて制作されました。

□　収録作品　□

[1] 舞 ～ フルートソロのために（2001）
[2] バンドリの唄（1974）
[3] 遠い国々への伝言（1986）
[4] フルート、ヴィオラ、ピアノのためのアリア（1991）
[5] ヴァイオリンとピアノのための素描（1996）
[6] 遥望 ― 室内オーケストラのための（1999）

ご購入はメールまたはFAXで「音の杜」までお問い合わせください。

NHK ラジオ放送で1984年から夏休みに放送されている番組に、夏休み子ども科学相談があります。

回答者は各分野での専門家ですが、臆せず問いかける子どもの素朴な質問に、時には答えに窮し、翌日に答えが持ち越されることもあります。それに、質問者が幼児であっても、相手を一人前の人として回答する姿勢です。また、一つの質問をきっかけに大人も一緒に考え、次から次へ大きな広がりを感じさせることです。

敏直先生の作品も、歌うほどに、聴くほどにいろいろな広がりを感じます。

（ 条谷 慶江 ）

誰もが予想し得なかった東日本大震災の発生から５ヶ月が過ぎました。

いつまでも続く余震、原発問題もまだまだ長引きそうです。本当に気持ちが休まりません。

いったい日本列島の海の下で何がおきているのでしょうか？被災された方がたの平穏な生活が早く訪れるよう願ってやみません。

そんな中でも時がめぐり、暑い夏がやってまいりました。

こんな時こそ歌や音楽が、人々の心に勇気を与え、元気にさせてくれるはずです。

敏直先生の演奏会で奏でる優しいメロディーが、私たちの心をきっと癒してくれることでしょう。

（ 宮嶋 良子 ）

スタッフからの一言メッセージ！

「忘れかけた頃にやってくる」、などという言葉は、もう使えない位に次々と襲ってくる天災、事故。もう他人事ではすまない。自分勝手は許されない。便利さだけに囚われていてはいけない。大人達がしっかりしなければ。力を尽くさなければ。子どもたちが希望を抱いて未来を生きてゆくために。

なでしこジャパンありがとう。みんなみんな元気をくださった皆様ありがとうございます。今回もまた、志ある演奏家の方々による佐藤敏直作品を、音の杜から皆様にお届けできることに感謝いたします。微力ではございますが、どうぞ心が潤いますように。

（ 瀧澤 かおり ）

「音の杜」のホームページをリニューアルしました。スタッフに参加させていただいてからずっと課題だったのですが、ようやく実現することができました。

各ページには、敏直先生がスケッチブックに描かれた絵が画面のトップに出るようになっています。アクセスする度に別の絵が表示されるようにしてあります。

ブログ形式のページも作りました。「音の杜」の活動状況などをタイムリーにお知らせできると思います

内容はまだ十分ではありませんが、今後は敏直先生が書かれた著作物を中心にコンテンツの充実を図っていきたいと考えています。

（ 山澤 昭彦 ）

● 音の杜 ～佐藤敏直プロジェクト～ 会報誌 Vol. 11　2011 年 8 月 10 日発行
● スタッフ：大谷惠美（代表）／条谷慶江／瀧澤かおり／宮嶋良子／山澤昭彦／
● 〒101-0065 東京都千代田区西神田２－４－１ （財）東方学会 41 号室
tel. 03-3239-1906　fax. 03-3239-1907
e-mail：otonomori@otonomori.com　ホームページ：http：//www.otonomori.com